

### 3. 教師教育教材利用状況と利用効果調査について

#### ——教育実習の日々シリーズを中心に——

赤堀正宜

#### 1. 研究の目的と経緯

教師教育教材は、大学における教師教育が教育実践を基盤に教育に関する理論の教育を深めるようにとの意図で、昭和59年に制作を開始してから5年が経過した。この間に制作され、頒布された教材は、10シリーズ、47本になる（表1）。また頒布された本数は4844本（1989年7月31日現在）、頒布大学は国公立私立大学、短期大学をあわせて356大学である（表2）。その他教育委員会等の購入が進みつつある。

このような状況をみると、教師教育教材は、多くの大学で利用され、教育効果を上げるのに貢献しているだろうと予測される。そこで教師教育研究班では、今後の制作改善と指針に対する資料を得る目的で、昭和63年6月11日の教師教育教材企画委員会において、利用状況と効果調査を行うことがきまった。

表1 シリーズと制作本数(頒布済み)

シリーズ名	制作本数
教育実習の日々	6
実習生の授業	11
ある教師の授業	10
教育とコンピュータ(小)	4
教育と施設	3
体育～鉄棒～	4
幼稚園の保育	6
教育とメディア	2
その他	1
計	47

(注) 制作済みシリーズ6本がある。

表2 頒布本数

大学別	国 立	公 立	私 立	他	計
大学数	66	44	246		356
頒布数	1772	321	1285	1466	4844

1989・7・31

(注) 公立は公立短期大学をふくむ。

私立は私立短期大学をふくむ。

他は教育委員会等

#### 2. 教師教育教材企画委員会の方針

##### 2.1 基本方針の決定

昭和63年9月20日に開かれた企画委員会において次ぎの基本方針が決定された。

##### (1) 基本方針の検討

評価に関する調査の実施にあたって、基本的に次ぎの項目で行なうことが検討された。

① 調査票は、教師用と学生用の2種類を作成する。

② 調査票の調査項目作成にあつては、教師教育ビデオ教材を「教育実習の日々シリーズ」、「教育実習生の授業シリーズ」、「ある教師の授業シリーズ」、の3つのカテゴリーに区分し、全カテゴリーに共通した調査項目とカテゴリーごとの調査項目を作成する。

制作に至る経緯とその後の経過は、MME 研究ノートNo. 32「教師教育のビデオ教材」(1986)に詳しいが、制作に先立って昭和59年に実施したアンケートでは、教師教育で必要とする教材の第一は「教育実習用教材」であった。この結果をふまえて制作された教材が、「教育実習の日々シリーズ6本」「実習生の授業シリーズ11本」「ある教師の授業シリーズ10本」である。調査対象の教材は最初に制作され、利用頻度の多いと推測される「教育実習の日々シリーズ」を中心に授業シリーズに焦点を絞って行なう事になったのである。

#### (2) 予備調査の実施について

調査対象をしばらく本調査の効率を高めるために、教材が実際に使用されているかどうかの予備調査を行なうこととなった。

#### 2.2 予備調査の実施

調査の効率化を考えて、本調査に先立って利用教員の洗い出しを行なった。教材を購入している大学は広範囲にわたっているが、実際に利用しているかどうかまた利用教員は誰かが明らかにならなければ、調査票の回収が思わしくないと考えたからである。

調査方法は、全教材名をリストアップした表を購入した大学に送り、昭和62年度、63年度に使った教材に○印をつけて返送してもらう方法をとった。調査票は、教材購入実績のある大学の事務局宛に放送教育開発センターより公文書で送られ、調査が依頼された。

予備調査の実施日 昭和63年9月20日(締め切り 昭和63年10月15日)

配布大学数	配布大学	回答数	回答率
	国立大学	64	55
	公立大学	11	7
	公立短大	6	5
	私立大学	147	103
	私立短大	48	30
	計	276	200
			72.4%

調査の結果は、表3に示すように利用教員は313大学、558人、利用されている教材の総数は1,001本であった。

表3 教師教育教材利用状況（予備調査集計）

（昭和63年11月30日現在）

	国 立 大 学 （送付64大学） （回答55大学）	公 立 大 学 （送付11大学） （回答7大学）	公立短期大学 （送付6大学） （回答5大学）	私 立 大 学 （送付147大学） （回答103大学）	私立短期大学 （送付48大学） （回答30大学）	計 （送付276大学） （回答200大学）
	大学 教員 教材	大学 教員 教材	大学 教員 教材	大学 教員 教材	大学 教員 教材	大学 教員 教材
教育の日々 実習の授業	30 62 136	7 13 30	5 5 10	74 135 252	21 27 37	137 239 465
あるの 教授業	28 69 148	7 13 39	1 1 1	60 107 169	16 21 28	112 211 385
(延数) 計	83 181 368	18 35 81	6 6 11	165 281 467	41 55 74	313 558 1,001

## 2.3 本調査の実施と集計

(1) 本調査の調査票の作成のためのワーキング・グループが企画委員会の中に設置された。高桑委員が教師用の、そして高橋委員が学生用の調査票作成の責任を負い、井上委員と赤堀が補佐として参加することになった。

昭和63年12月1日 本調査票決定（坂元主査の監修済み）

昭和63年12月24日 印刷・納入

本調査票の配布と回収は郵送法で行なわれたが、結果は次の通りである。

- ① 配布対象大学は、予備調査で利用実績のある教員がいる大学で大学長宛
- ② 調査対象期間：調査票到着から平成元年2月28日
- ③ 配布大学数： 149大学

表4 調査票配布大学数

大学種別	国立大学	公立大学	公立短大	私立大学	私立短大	計
大 学 数	36	7	5	78	23	149

## ⑤ 回収状況

表5 調査票の回収状況

回 答 者	教 員				学 生				計
	教育実 習日々	実習生 の授業	ある教 師授業	計	教育実 習日々	実習生 の授業	ある教 師授業	計	
国 立 大 学	49	46	35	130	619	236	149	1004	1134
公 立 大 学	3	2	1	6	15	93	34	142	148
私 立 大 学	37	26	3	66	238	244	67	549	615
短 期 大 学	10	9	4	23	269	259	100	628	651
無 答	1			1					1
計	100	83	43	226	1141	832	350	2323	2549

回収率は40.5%である。

なお調査票は参考資料として添付してあるので参照されたい。

### (2) 結果の集計

結果の分析は、ワーキング・グループによって行なわれることになった。利用された教材、利用大学、学年にかなりばらつきが見られたが、基本的には、①大学については、国立、公立、私立、短大別、②利用教材については、「実習の日々シリーズ」「教師の授業シリーズ」「実習生の授業シリーズ」に分けて集計する。③学生については、学年別集計とする。④教員の回答と学生の回答をわけて集計する事と決まった。

集計は、この方針に基づいて専門業者に依頼することとした。

## 3. 結果の要約

集計表は600ページに及ぶ膨大なものとなった。そこで、要点のみをピックアップして整理することとし、赤堀が責任をもっておこなった。以下はその要約である。

なお、集計結果は、付表として、報告書の末尾に掲載してある。

### 3.1 結果の要約・その1～教員からの回答～

教員100名から回答があった。

#### (1). 利用教材名（付表1）

教育実習の日々5本について、ほぼ均等に利用されている。やや「付属中学・高等学校編」が多い。

#### (2). 利用方法（付表2）

教育実習の事前指導、オリエンテーション、教職課程の一環として利用している。

#### (3). 利用の仕方（表3・1、3・2）

利用の仕方としては、一斉視聴が多い。

(4). 事前指導 (付表 4)

視聴前の指導として講義をしその後に見せたのは63%、無指導は16%である。

(5). 事後指導 (付表 5)

視聴後の指導として補足的解説や感想をかかせている。

(6). 学生の反応 ①意欲 (付表 6)

教育実習に対する学生の意欲の高まりについて、61%の教員は認めている。

(7). 学生の反応 ②内容 (付表 7)

教材の内容については、実習のイメージを理解させるのに適切と考える教員が多い。

(8). 印刷教材の利用 (付表 8)

ビデオ教材とセットになっている印刷教材を教員が利用した場合と学生にも利用させたケースが54%を占め、いかなる印刷教材も利用しないケースも35%あった。

(9). 内容の評価 (付表 9)

教材の内容や構成にたいする教員の評価は、かなり高い。

(10). 学生の反応 ③実習の流れの理解 (付表10)

利用方法別に見ると、教職課程に関心のある学生に随時見せた場合の評価が一番高く事前指導として見せた場合の学生の反応がそれについている。

(11). 学生の反応 ④意欲の高まり (付表11)

無指導より指導した方が学生の意欲が高まることは既にのべた。それでは、視聴効果をあげる指導の仕方は何であろうか。

a. 事前指導の場合は、実習の意義について講義をし、b. 利用中の指導としては、視聴を中断して補足的な解説をし、c. 事後指導においては討議をさせ、感想を書かせるとよい、と教員は判断している。

(12). 学生の反応 ⑤内容の理解 (付表12・1、12・2、12・3)

内容を理解させる指導方法としては、学生の教育実習への意欲を高める指導と同じように、講義をし、補足的解説を加え、討議や感想を書かせることである。

付け加えれば、NHKにおける学校放送利別調査で既に同様な結果が得られている。

### 3.2 結果の要約・その2～学生の回答～

学生からは、1141件の回答をえた。先ず学生の属性を見る。なお山口大学(国立)、広島女学院大学(私立)、関東短期大学(私立)は細かい分析を行なう目的で特別に抽出した。これらは総数の中に含まれている。

(1). 所属大学と所属学年 (付表13・1、13・2、付表14・1、14・2)

国立大学生が半数を占める。学年については、国立大学は3年生、私立大学は4年生、短期大学は2年生が中心である。

(2). 取得希望免許状と教科 (付表15・1、15・2、15・3)

国立大学生は1/2が小学校免許、1/4ずつがそれぞれ中・高校免許、私立大学では中・高校免許が60%、短大の「その他」は幼稚園免許と推測される。

取得希望教科は9科目について平均化しているが、国語と英語がやや多い。回答学生は中・高校免許取得希望者の591名であった。

(3). 視聴したビデオ（付表16・1、16・2）

視聴した教材は付属中・高校編、公立小学校編、公立中学校編に集中し、私立大学では付属中・高校編が中心である。

(4). 視聴場面（付表17・1、17・2）

教育実習の事前指導を中心に、オリエンテーションと正規の授業の中で視聴している。この傾向は教員の回答と同じである。しかし国立大学においては、正規の授業での利用が40%にのぼる。（表5参照）

(5). 利用の仕方（付表18）

ほとんど一斉視聴である。（教員の回答と同じ）（付表3・1、3・2参照）

(6). 事前、視聴中、事後の指導（付表19・1、19・2）

この項目については無答が多い。回答した40%の学生に関して云えば、それぞれの段階で指導を受けている。複数の回答をした学生も見られた。

(7). 印刷教材の活用（付表20）

印刷教材の利用はあまりすすんでいない。理由は明確でない。しかし関東短大では、添付された印刷教材の主要部分をコピーして使用した。教員と学生の回答の間に乖離が見られる。

(8). 実習後の感想 ①内容について（付表21）

無答が多い。理由は実習未終了のためと思われる。無答の少ない私立大学と広島女学院の回答をみると、積極的に評価している学生が多い。

(9). 実習後の感想 ②教育実習像について（付表22）

無答の少ない私立大学と広島女子学院の回答から、視聴を通して教育実習のイメージがつかめたことが分かる。

(10). 視聴効果 ①教師の仕事の理解（付表23・1、23・2）

この項目に関しては、「あまりつかめない」という負の反応もかなりみられる。

### 3.3 結果の要約・その3～実習生の授業～

実習生の授業シリーズは幼稚園1、小学校4、中学校3、高等学校3の11本からなっている。調査は幼稚園を除く10本について行なわれた。利用頻度の高い教科は、小学校においては国語、中学校は英語、高等学校は国語に集中している。（付表24）

(1). 利用場面（付表25）

利用場面は教育実習の事前指導と正規の授業においてが中心であるが、国立大学、私立短期大学においては正規の授業で、私立大学においては事前指導とにわかれている。

(2). 印刷教材の利用（付表26）

教材に添付されている印刷教材の利用はおしなべて低い。

(3). 視聴効果 ①授業をみる視点 ②授業の流れ、構造

③発問の仕方（付表27・1、27・2、27・3）

視聴効果に関して、上記の3点について理解できたかどうかを質問した。結果は3点に共通している。

消極的評価はそう多くはないが、積極的に高く評価する学生が多いとも云えない。学生に

として、授業をどのように授業分析し評価したらよいかの事前指導が必要である。

(4). 視聴効果 ④実習授業への心構え（付表28・1、28・2）

無答を除いた回答に限って云えば、高い評価を得た。特に私立大学、山口大学、広島女学院大学にそれがよく見られた。

3.4 結果の要約・その4～ある教師の授業について～（付表29・1）

調査対象教材は小学校3本、中学校1本、高等学校4本の計8本である。利用件数は354で取得希望教科と利用教科教材とは一致している。授業技術に関する2項目について見てみよう。

小学校算数、小学校理科、中学校数学の利用が比較的多い。取得希望免許教科との関連を見ると、中学数学希望者（49人）全員が数学の授業を視聴している。そこで中学数学グループに的をしぼって考えてみる。

実習経験の有無（付表29・2）をみると、経験者が多い。教育実習が授業を見る目を育て、理解度を高めていると推測される。実習と視聴との相互のくりかえしが効果的である。

(1). 視聴効果 方法の理解、中学算数グループ（付表29・3）

評価「まあまあ」「普通」が多く、教育実習の経験が教材の理解に生かされていると言えそうである。

(2). 視聴効果 授業の視点について（付表30）

無答が多いのでデータが読みにくい。教育実習と関係づけて利用するより、正規の授業のなかで利用されるほうが多い。

無答の解釈としては、学生にとって授業をどう見たらよいか分からないから評価の仕様がなないと云うことであろうか。

(3). 視聴効果 授業をみる視点（付表31）

教材の理解度を学年別に調べてみると、興味深い事実が分かった。1・2年生は授業をみる視点はどこにあるか学習していないため無答が多い。しかし学年が進むにつれて授業を見る目が育ち、無答が少なくなる。4年生の理解度が一番高い。この結果から、1・2年生での利用はあまり効果が上がらないのではなかろうか。

#### 4. 結果の発表

集計結果は、企画委員会の了解のもとに、以下の研究会において発表された。

(1) 日本教育学会（筑波大学）

1989年8月28日～30日

(2) 放送教育開発センター公開研究会

1989年8月22日